

2013年度 選考結果

ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援

ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援は、ヘルスケアの視点を重視したより良い社会への寄与を目的として、心とからだのヘルスケアの分野で活躍が期待される市民活動・市民研究を応援する助成プログラムです。

第13回となる本年度は、新規助成として、全国から145件のご応募を頂き、そのうち8件（助成総額1,539万円）が、また、継続助成として8件（助成総額1,500万円）が、それぞれの選考委員会による厳正なる選考の結果、助成対象プロジェクトとして選ばれました。

■ プログラム創設の目的

- (1) ヘルスケアの領域で今後一層の活躍が見込まれる市民活動を発掘し、その活動を後押しすること。
- (2) これからの社会の担い手として重要な役割が期待される市民活動自体の社会的認知を高めること。

■ プログラムの特徴

- (1) ヘルスケアを広く捉え、本業（医薬品の提供や医療）だけでは賅えないヘルスケアの分野で活動する市民団体を支援対象としていること。
- (2) 政府や自治体などの公的機関からのサービスや社会資源の十分に整っていない分野の市民活動・市民研究を重点的に支援していること。
- (3) 団体としての過去の実績ではなく、その団体が取り組もうとしているプロジェクトの独創性・試行性に評価の重点を置いていること。
- (4) 単年だけではなく、最長3年間の継続した支援も行なっていること。
- (5) プロジェクトに携わる人の人件費や、事務所家賃・光熱費などの事務局経費も助成すること。
- (6) 助成先団体の情報交換の場を提供していること。
- (7) 市民活動の社会的認知の向上を目的とした広報活動も行なっていること。

■ 助成対象（新規助成）

「中堅世代」の人々（主に30・40・50歳代）の心身のケアに関する課題。

■ 重点課題（継続助成）

- (1) 中堅世代の人々（主に30・40・50歳代）の心身のケアに関する課題。
- (2) 心身のケアが得ることが困難な人々の健康の保障に関する課題。
- (3) 上記各課題の解決に関連したヘルスケアを重視した社会の実現に関する課題。

■ 選考委員会

〈新規助成〉

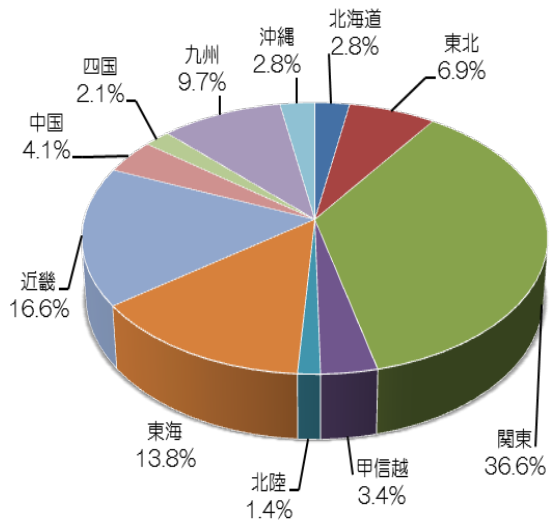
委員長	武井 秀夫	千葉大学	名誉教授
委員	常田 秀子	和光大学	現代人間学部 准教授
委員	前野 一雄	国際医療福祉大学	総合教育センター長・医療福祉学部 教授
委員	松下 典子	特定非営利活動法人地域福祉サポートちた	前代表理事
委員	豊沢 泰人	ファイザー株式会社	執行役員 経営政策管理本部長

〈継続助成〉

委員長	武井 秀夫	千葉大学	名誉教授
委員	安藤 雄太	東京ボランティア・市民活動センター	アドバイザー
委員	常田 秀子	和光大学	現代人間学部 准教授
委員	松下 典子	特定非営利活動法人地域福祉サポートちた	前代表理事
委員	豊沢 泰人	ファイザー株式会社	執行役員 経営政策管理本部長

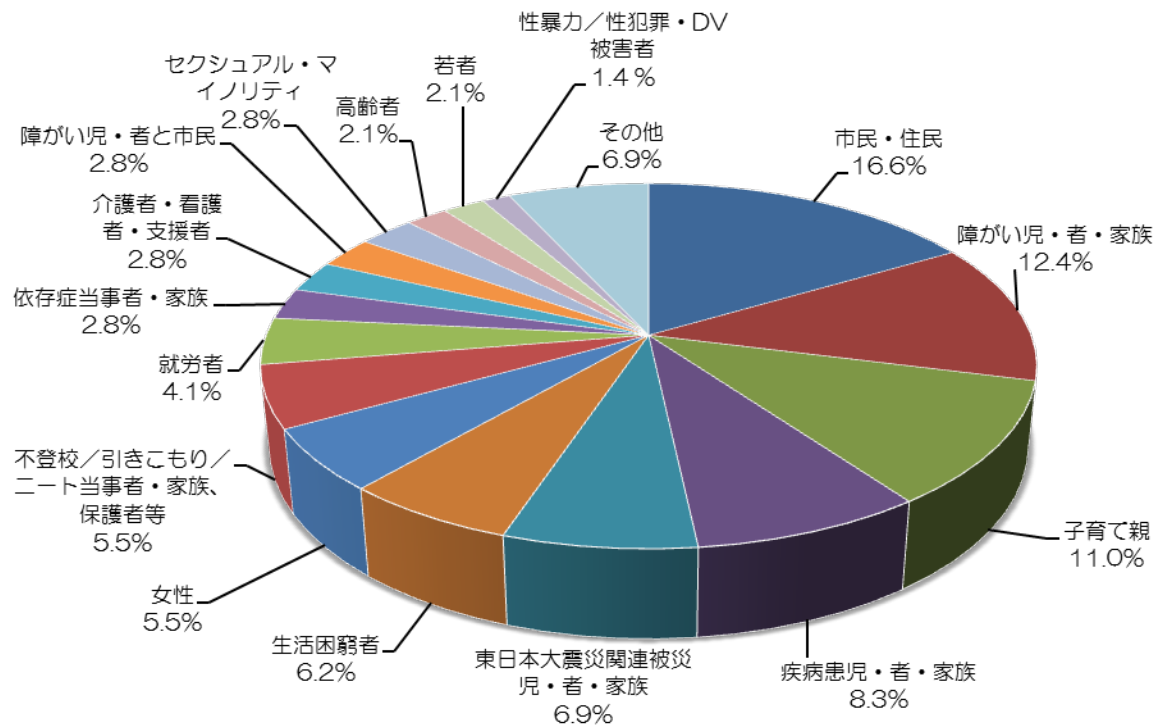
2013 年度 新規助成 応募状況

1. 団体所在地



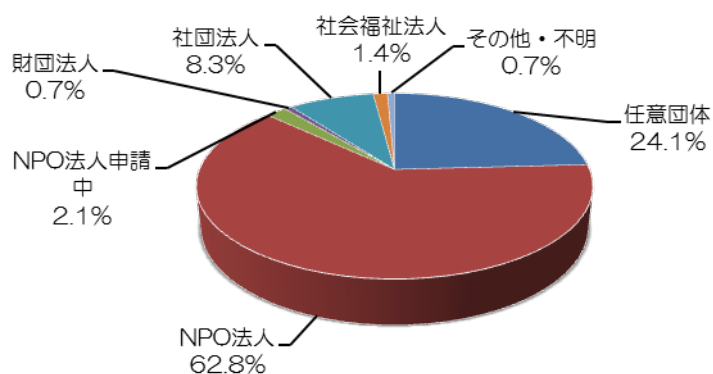
都道府県	団体数	都道府県	団体数
北海道	4	三重	2
青森	1	滋賀	4
岩手	3	京都	5
宮城	4	大阪	7
秋田	0	兵庫	6
山形	1	奈良	0
福島	1	和歌山	0
茨城	1	鳥取	1
栃木	2	島根	0
群馬	1	岡山	2
埼玉	4	広島	2
千葉	5	山口	1
東京	35	徳島	0
神奈川	5	香川	1
新潟	1	愛媛	0
山梨	2	高知	2
長野	2	福岡	2
富山	1	佐賀	2
石川	1	長崎	3
福井	0	熊本	4
岐阜	3	大分	1
静岡	3	宮崎	2
愛知	14	鹿児島	0
		沖縄	4
		計	145

2. 支援対象の分類

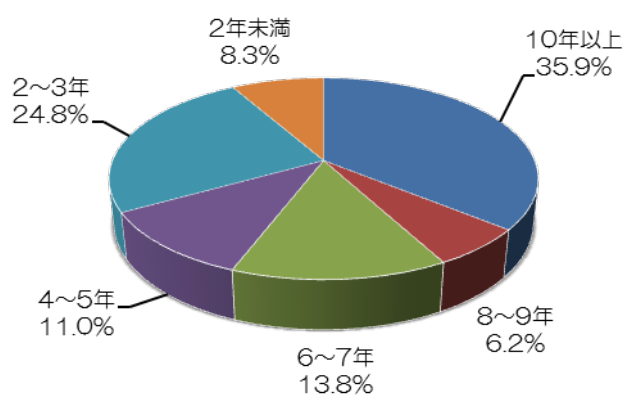


3. 組織形態

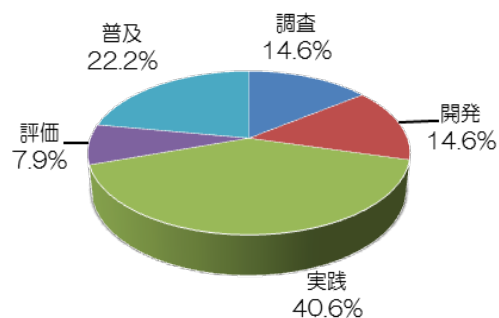
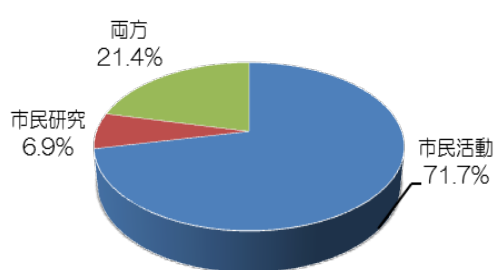
○法人種別



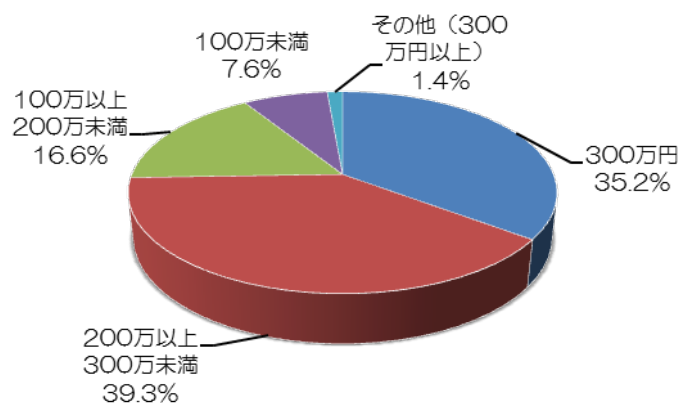
○活動年数



4. 応募種別



5. 応募金額



2013 年度助成対象プロジェクト一覧
 ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援
 －新規助成(助成1年目)－

	活動	研究	プロジェクト名	団体名	代表者	所在地	助成額 (万円)
1	○		東日本大震災と原発不安からの心と体の健康回復プロジェクト	特定非営利活動法人 いわき緊急サポートセンター	前澤 由美	福島	101
2	○		共生・共助・連帯～中堅世代と限界集落化の村に元気をつくる活動	特定非営利活動法人 さいたま自立就労支援センター	菅田 紀克	埼玉	222
3	○		薬物依存症者の子育て支援プログラム	特定非営利活動法人 ダルク女性ハウス	須賀 一郎	東京	276
4		○	ロービジョンの人々の理解とIT 機器やシステムを活用した職場環境改善提案	特定非営利活動法人 ハーモニー・アイ	馬場 寿実	東京	135
5	○		精神障害者当事者ビジネスの推進	青梅精神障害者当事者ビジネスグループ「ぶ〜け」	安島 常貴	東京	165
6	○		中堅世代がん体験者の心とからだを元気にするネットラジオ・コミュニティ	特定非営利活動法人 ミーネット	花井 美紀	愛知	260
7	○		育ち合う中で生活困窮者が地域の担い手となるプロジェクト	特定非営利活動法人 岡山・ホームレス支援きずな	宇野 稔	岡山	248
8	○	○	沖縄県北部圏域の療育ファミリーを総合的に支援するプロジェクト	特定非営利活動法人 療育ファミリーサポートほほえみ	福峯 静香	沖縄	132
助成総額[8件・合計] 1,539 万円							

(2013 年度の助成期間は、2014 年 1 月 1 日～12 月 31 日です)

2013 年度助成対象プロジェクト一覧
 ファイザープログラム～心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援
 ー継続助成ー

	活 動	研 究	プロジェクト名	団体名	代表者	所在地	助成額 (万円)
《助成2年目》							
1	○		発達に障がいのある子ども・若者のための心とからだの講座～ファシリテーターの養成および交流サロンの開催～	特定非営利活動法人 子ども&まちネット	伊藤 一美	愛知	174
2	○		中国帰国者に対する介護予防教室と地域ネットワーク形成	夕陽紅(シーヤンホン)の会	牧田 幸文	京都	145
3	○		月と風と 劇場型銭湯2014	特定非営利活動法人 月と風と	清田 仁之	兵庫	283
4	○		臨床美術によるメンタルヘルスケア事業	特定非営利活動法人 沖縄県福祉ネットワーク協会	赤嶺 徳仁	沖縄	100
《助成3年目》							
5	○		どんまいネットみやぎ推進プロジェクト	特定非営利活動法人 ほっぶの森	白木 福次郎	宮城	168
6	○		薬物・アルコール依存症者の自立支援および就労プログラム開発モデル事業	特定非営利活動法人 潮騒ジョブトレーニングセンター	栗原 豊	茨城	250
7	○		刑務所を出所した薬物依存症者の包括的な回復支援プロジェクト	フリーダム	倉田 めば	大阪	200
8	○	○	死の直後から寄り添い支える「wiz サポーター」派遣システム構築プロジェクト	カウンセリングスペース『リヴ』	佐藤 まどか	大阪	180
助成総額〔8 件・合計〕					1,500 万円		

(2013 年度の助成期間は、2014 年 1 月 1 日～12 月 31 日です)

新規助成の選考経過と助成の特徴

新規助成選考委員長 武井 秀夫

今年度のファイザープログラムには課題設定において大きな変更が行われた。重点課題を「中堅世代の心とからだのヘルスケア」を対象とするものに絞ったことである。そこには、格差の拡大、非正規雇用の増大、生活困窮者の増加など、「中堅世代」を取り巻く社会環境が悪化していることや、「中堅世代」は「子育て世代」であり、「介護世代」でもある、大きな負荷のかかっている世代であるという認識がある。

重点課題を絞ったことで、一定の応募件数減を予想していたが、蓋を開けて見れば145件の応募があり、昨年度のほぼ3分の2であった。しかし、内容的には、昨年度に散見されたヘルスケアとは無関係のプロジェクトや学術研究的なプロジェクトが姿を消したこともあり、従来の活動に「中堅世代」をとってつけたような企画も少数ではあれ存在したとはいえ、たくさんの的確な応募をいただいたと考えている。

145件の応募の内訳を概観すると、市民活動71.7%、市民研究6.9%、市民活動+市民研究21.4%であり、昨年に比べると市民研究を含むプロジェクトがわずかに減少している。都道府県別に見ると、東京35件、愛知14件が突出しているほかは、応募団体のなかった8県を除いて、他府県は1~7件であった。これは5大都市圏からの応募が過半数を占めた昨年とは趣を異にしている。1件あたりの応募金額は、300万円が35.2%、200万円以上300万円未満39.3%、100万円以上200万円未満16.6%、100万円未満7.6%、300万円超1.4%であり、昨年度とほぼ同等であった。支援対象・テーマ別に見ると、「市民・住民」が16.6%と最も多く、次いで「障害関連」が12.4%、「子育て中の親」11.0%、「疾病関連」が8.3%、「東日本大震災関連」6.9%、「生活困窮者」6.2%、「女性」5.5%、「引きこもり、ニート等」5.5%と続き、以下「就労関連」、「依存症」、「介護関連」、「セクシャル・マイノリティ」、「高齢者」、「若者」「DV・性暴力」がそれぞれ4.1~1.4%、その他6.9%である。支援対象・テーマを概観すると、従来と同様の多様性を見せてはいるものの、もう一方で、まだまだグレーゾーンに置かれている課題があるのではないかと感じられる。今年度の重点課題を「中堅世代」を対象とするものに絞ったことには、この世代が抱えるヘルスケア課題を新たに発掘していただけたらという期待もあったからである。この点は次年度以降に期待したい。

助成対象プロジェクトの選考プロセスは、まず第1段階として外部選考委員2名とファイザー社担当者1名、市民社会創造ファンド担当者1名の計4名からなる予備選考委員会で、すべての応募書類を予備選考基準に沿って審査し、145件の案件から51件を本選考の対象として選出し、同時に実施されたファイザー社によるコンプライアンスチェックで、このうちの3件が助成不可となった。第2段階では外部選考委員3名、ファイザー社選考委員1名の計4名が、それぞれ本選考の対象となった48件すべてについて評価を行い、選考基準に則って推薦5件、準推薦2件を選出した。第3段階として、8月10日に本選考委員会（本審査）が開催され、推薦または準推

薦のなかった案件も含めて1件1件について細かく評価し、最終的に助成候補6件、補欠3件、計9件のプロジェクトが選定された。第4段階では、プログラム事務局が約3週間をかけて、選定された9件のプロジェクトについて、各団体にヒアリングをさせていただき、最後に、事務局によるヒアリング報告を踏まえて、最終的な採否と、各助成対象プロジェクトに対する助成金額を決定した。その結果、今年度の新規助成対象は8件、助成総額は1,539万円となった。

今回の助成の特徴をいくつかあげておく。まず市民研究を含むプロジェクトが8件中の2件(25.0%)と昨年より減ってはいるが、これは応募全体の傾向と連動しているように思われる。応募プロジェクトの中で農業を活動のツールとする企画が目立ったこととも関係して、農業を核に、就労と地域活性化をつなごうとするプロジェクトが高い評価を受けた。こうした活動を通じた地域との連携が地域にどのような動きを生み出していくのか、期待とともに見守りたい。また、地域に根ざした支援活動を志向するプロジェクトにも、それぞれの地域特性を踏まえた優れたプロジェクトがあり、単なる要支援対象者への「点」での支援ではなく、いわば地域という「面」における支援へという志向が強く感じられる。さらに、中堅世代を対象とすることで、すでに示したように「市民・住民」、「子育て中の親」への支援プロジェクトや、「生活困窮者」・「就労」関連のプロジェクトが増加している。昨年度は、新しい発想で横のつながりを志向する企画があったが、今年度は、それがさらに広がって、地域という「面」への志向に発展してきているように見える。それぞれのプロジェクト活動からどのような「面」が展開していくのか、期待して見守りたい。

<新規助成の選考日程および手続き>

選考は下記の日程および手続きにより実施されました。

【応募受付】6月10日～24日（応募総数：145件）

↓

【予備審査委員会】7月20日

↓

【選考委員会】8月10日

↓

【委員長決済・選考結果】助成件数8件、助成総額1,539万円を決定。

*上記プロセスと平行して、ファイザー社内担当部署による、医薬品業界・社内規定および関係法規に基づくコンプライアンス確認作業を実施。

新規助成対象プロジェクトの概要と選考委員会推薦理由

【新規助成】

(1) プロジェクト名： 東日本大震災と原発不安からの心と体の健康回復プロジェクト

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人いわき緊急サポートセンター

代表者名： 前澤 由美

主な活動地域： 福島県

本団体は、働く親の子育てをサポートする目的で、育児相談、病児保育、一時保育などのサービスを提供している。しかし、東日本大震災と原発事故により、いわき市外への転出者が相次ぐ一方で、警戒区域からいわき市内への転入者が増加し、多くの未解決の地域課題を抱え、子育て環境は厳しい状況となっている。

生活再建期の支援として、複雑、多様化した家庭環境にあわせた個別支援が必要であり、本プロジェクトは、中堅世代が多い地域に拠点を整備し、地域支援ネットワークの強化に取り組む。孤立しがちな子育て家庭におけるメンタルヘルスケアの改善、親の不調による子どもへの影響を軽減するためのきめ細やかな相談事業の整備、交流会、勉強会を通じた地域の絆づくりを目指す。

安心できる子育て環境を取り戻すために、当事者の視点で、変容していく被災地、子育て世帯の課題、ニーズに柔軟に対応し、問題解決の仕組みが構築されるよう期待したい。

(2) プロジェクト名： 共生・共助・連帯～中堅世代と限界集落化の村に元気をつくる活動

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人さいたま自立就労支援センター

代表者名： 菅田 紀克

主な活動地域： 埼玉県

本団体は発足から10年、ホームレスなど社会的弱者に対して、就労の場づくりと人が育ち合う環境づくりに地道に取り組んできた。

本プロジェクトは、一般就労になじまない人たちが農業や自然の中に身を置くことで、自らの解決力、生活意欲を取り戻す就労の場づくりに取り組む。この取り組みは人間が本来持っている治癒力を引き出し、新たな希望を生み出す機会となる。また、もう一つの生き方や、新しい働き方と出会い、自信を持ち、社会にメッセージを発信する新住民ともなるだろう。更には、中山間地で暮らしてきた人たちの過去、現在の暮らしと対話することで、一人ひとりが自分を振り返る機会にもなり得る。学生たちの調査や発想も大いに活用し、そこに住む人たちの想いとそれぞれが出来ることを就労に重ね、見て、考え、活動する場からは地域の活かし方、人のつながり方が見えてくるだろう。

未来に向けた包括的デザインとストーリー性を持ったプロジェクトである。ゆっくりと丁寧に信頼関係をつくり、共生、共助、連帯で支えられた地域が実現するよう期待したい。

- (3) プロジェクト名： 薬物依存症者の子育て支援プログラム
助成種別： 市民活動
団体名： 特定非営利活動法人ダルク女性ハウス
代表者名： 須賀 一郎
主な活動地域： 東京都

本団体は 1991 年に日本で最初の薬物・アルコール依存症女性の回復と自立を支援する民間施設として発足し、薬物を止め、地域で安心して暮らせるよう、依存症女性の支援を行ってきた。

元来、親子を分離して行うことが多かった依存症の治療であるが、本プロジェクトは、回復後の母子が再度一緒に生活することを見据えて、定期的に両者が一緒に過ごし、料理やアート活動に取り組んだり、母親同士の交流や子ども同士のキャンプの機会を提供する。これらの活動によって、母子が安心して家庭生活のスタートが切れるようにし、母親の育児力を高めて虐待を未然に防ぎ、当たり前の生活の経験が乏しかった依存症の母親と子どもたちに、生活体験や生活技術を教えることも可能となる。

依存症の母親への支援を通して、その影響下にあった子どもたちが、将来、機能不全の家族を再生産することなく幸せな家庭を築く手助けとなり、広がりのある意欲的な活動になることを期待したい。

- (4) プロジェクト名： ロービジョンの人々の理解と IT 機器やシステムを活用した職場環境改善提案
助成種別： 市民研究
団体名： 特定非営利活動法人ハーモニー・アイ
代表者名： 馬場 寿実
主な活動地域： 東京都

本団体は視機能に問題があり、矯正できない状態にあり、日常生活に支障があるロービジョンの人々や高齢者など、情報弱者が情報に容易にアクセスできるよう支援を行い、ユニバーサルな情報受発信の必要性を啓発し、活動している団体である。

目の障害によりロービジョンになる年代は、中高年以降に多いと言われる。仕事をしている中堅世代が「見えにくい」状態に陥った時、雇用者側と適切な支援体制を構築することが必要になるが、被雇用者と雇用者の双方に十分な情報や支援技術のノウハウが共有できていないため、仕事の継続に支障をきたすケースが多いのが現状である。

本プロジェクトは、実際にロービジョンを抱えながら現役で働く人々と企業側の現状調査と課題の分析を行う。当事者が自立した社会生活を継続することができ、企業側は社員の多様性を包括し、それを活かしていく職場環境作りにつなげるために、現場の目線で双方の現状とニーズを把握し、具体的な解決策が提言されるよう期待したい。

(5) プロジェクト名： 精神障害者当事者ビジネスの推進

助 成 種 別： 市民活動

団 体 名： 青梅精神障害者当事者ビジネスグループ「ぶ〜け」

代 表 者 氏 名： 安島 常貴

主な活動地域： 東京都

障害者雇用促進法により身体・知的障害者の一定割合の雇用を企業に義務付けており、国は新たに、うつ病や統合失調症などの精神障害者の雇用も義務付け、支援体制の充実に取り組んでいる。

本プロジェクトはカナダ・トロント市での実践例を取り入れ、東京・青梅市で精神障害者自らがハウスクリーニング事業を運営し、メンバーの特技を生かして、英語観光通訳事業を新たに立ち上げる。団体の設立からまだ2年余りであり、スタッフの経験、体制、資金など多くの面でリスクが指摘されたが、新しい当事者ビジネスとしてのユニークさに注目し、障害者と健常者が社会生活を共にするノーマライゼーションを力強く推進する取り組みとして期待される。事業の推進にはコーディネーターが欠かせず、顧客との間でトラブルが起きた時、サポーターや医師などのフォロー体制も必要不可欠であるが、当事者がリスクマネジメントを学ぶ機会になることの重要性も指摘された。

この試みが根付けば、各地に広がる可能性を秘めたプロジェクトとなるので期待したい。

(6) プロジェクト名： 中堅世代がん体験者の心とからだを元気にするネットラジオ・コミュニティ

助 成 種 別： 市民活動

団 体 名： 特定非営利活動法人ミーネット

代 表 者 名： 花井 美紀

主な活動地域： 愛知県

本団体は長年、がんのピアサポーターを養成し、がん体験者の相談に乗ることで、がん体験者が抱える様々な悩みや問題解決の支援に取り組んできた。

本プロジェクトは、ピアサポーターが出演するネットラジオ番組の制作と配信を企画している。がん体験者の悩みを共有できる身近さや、聴き手との双方向のコミュニケーションが可能な点、アーカイブ化することで関心がある人がいつでもアクセスできる点、全国への配信が容易である点など、多くの利点を持っており、忙しい中堅世代のがん体験者にとっても有効なシステムとなる。また、ネットラジオでの情報提供が軌道に乗れば、他の疾病や障害への応用も期待できる。

多様な利点と発展の可能性を持つ先駆的な試みであり、がん体験者のネットラジオ・コミュニティの創造に期待したい。

(7) プロジェクト名： 育ち合う中で生活困窮者が地域の担い手となるプロジェクト

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人岡山・ホームレス支援きずな

代表者氏名： 宇野 稔

主な活動地域： 岡山県

本プロジェクトは、複雑化する精神的生きづらさを抱えた人たちや生活困窮者が、地域を介して住民とつながり、みずから自分を取り戻していくための伴走的支援と、日常的に気軽に集える居場所づくりに取り組むものである。また、日常の小さな心の課題が積み重なって行き場を失い、社会から孤立した人たちが利用できる社会資源や相談窓口の情報を分かりやすく冊子にまとめて地域に提供する。

支援する人も当事者の支援を通して新たな解決方法を体得し、地域の関係者と共に双方向で問題解決の手法を学ぶ。「居場所」を拠点に社会の関係性や社会資源を見直し、多様化する価値観を認め合い、理解し合う市民の新しい学習の機会を提供し、育ちあう地域活動となる。

中堅世代をはじめ、あらゆる世代の人たちがいつでも「助けて」と素直に声に出せる開かれた居場所は、人間復活、コミュニティ再生としてこれからどの地域にも求められよう。

(8) プロジェクト名： 沖縄県北部圏域の療育ファミリーを総合的に支援するプロジェクト

助成種別： 市民活動・市民研究

団体名： 特定非営利活動法人療育ファミリーサポートほほえみ

代表者名： 福峯 静香

主な活動地域： 沖縄県

重度心身障害児を抱える家庭において、福祉サービスが行き届かない過疎地域での日常的な負担の深刻さは想像に難くない。本団体は、地域で中心的な役割を担う人材として期待される働き盛りの中堅世代が、家族だけで重荷を背負いこまず、身近なネットワークづくりをすることで、重度心身障害児とその家族の自立支援ニーズに的確に対応してきた。

本プロジェクトは、これまで8年にわたる沖縄県南部圏域での活動を通じて、行政サービスの充実へと導いた実績を基に、地域性の異なる北部圏域に支部を立ち上げ、新たな地域ニーズに向き合おうと取り組むものである。

地域特性をよく理解し、地に足の着いた市民活動として、行政をはじめ関係機関との連携や施策の提案につながるよう期待したい。

継続助成の選考経過と助成の特徴

継続助成選考委員長 武井秀夫

2007年にファイザープログラム第2期が開始された際に、重点課題の一つとして新たに取り上げられたものに「ヘルスケアを重視した社会の実現に関する課題」があるが、この「ヘルスケアを重視した社会の実現」こそファイザープログラムから展望されるものである。ファイザープログラムは先駆的、独創的で、社会的意義が大きい、未だ公的セクターなどからの支援が得にくい状況にある取り組みに対し、プロジェクトの社会的認知と自立に向けて支援していくことを大きな柱としてきた。それぞれのプロジェクトへの取り組みを通して、それを担う市民活動組織が成熟し、多様な横のつながりを生み出していくことで将来への展望も切り拓かれていく。それが、3年間までの継続助成を行うことで期待することである。

独創的な取り組み、新規性の強い取り組みほど、実践に移してみて初めて気付くことのできる関連課題も出てくるだろうし、課題の新たな側面や問題を発見することも多いと推測される。時にはそれがプロジェクトの構成変更や質的転換を促し、プロジェクトをさらに前進させる原動力となる場合も出てくるであろう。継続助成は、プロジェクトのそうした展開を支援するものでもある。

新規助成では書面（応募企画書）のみで選考を行うのに対して、継続助成では書面（次年度の企画書+今年度の中間報告書、あるいは次年度の企画書+今年度の中間報告書+前年度の完了報告書）だけではなく、団体代表者による活動報告と次年度のプロジェクト内容のプレゼンテーションを選考対象としており、特に直接質疑応答のできる後者が大きな比重を持っている。企画書の内容とプレゼン内容とがちぐはぐである場合、評価は低くならざるを得ない。今年度の選考では、そのために採択を見送った例がある。

今年度の応募数は、継続2年目が8件、継続3年目が5件の計13件である。9月21日に13団体すべてにプレゼンテーションをしていただいた後、5名の選考委員の間で1件1件について意見を交換し、助成対象を決定した。助成対象として採択されたのは継続2年目が4件、継続3年目が4件、計8件である。

選考委員の構成の多様性は多面的な審議のためには有効だが、時として船頭が多くなることもあり得る。今回の審議では、それぞれの案件について、各委員が評価するポイント、評価しないポイントを明確にして議論を進めていった結果、この8件の評価について大きく意見が割れることはなかった。

継続2年目の中で特に評価が高かったのは「月と風と」のプロジェクトである。重度の心身障害者を対象とした「つながりづくり」と言うと、とかく「大変だ」から出発して「難しく」考えられがちである。そこを、銭湯につかる心地よさの共有から始めようと発想を転換したことで、地域住民やボランティアを巻き込むさまざまなアイデアが生まれ、実施体制も順調に強化され

て行っている。その結果、横にも縦にも広がりを持ち、コミュニティの活性化もイメージできる活動へと展開しており、それが評価されたのである。

継続2年目で採択とならなかった案件は、計画の実施に十分対応できる体制になっていない、1年目の活動に追われて準備不足が目立つ、1年目の活動と2年目の展開がうまく接合していない、等があげられる。1年目に多くの活動を詰め込みすぎて、1年目の活動から2年目の計画へのフィードバックという点でも、2年目の活動の展開という点でも、消化不良になっている印象が強い。総花的な計画は必ずしも高い評価にはつながらない。1年目の計画段階で活動内容をよく整理し、どのように構成すれば適切な段階を踏んで展開可能なのか、十分に構想を練っておく必要があるのではないだろうか。

継続3年目で評価が高かったのは「潮騒ジョブトレーニングセンター」である。農業を通じた依存症者の自立支援と就労支援を行うプロジェクトだが、農地の拡大、支援農家の拡大、経済的自立を目指した商品作物栽培の展開など、地域との連携を確立しつつあり、農業を核とした就労モデルにもなり得る発展性が評価された。他方、支援者の拡大を促進するためにも、支援者に対する「依存症教育」が必要ではないかという指摘もあった。

継続3年目で採択にならなかった案件は、2年目までの取り組みは非常に上手くいっており、支援対象者との関係構築も適切なのだが、次へのステップが見えない。支援対象者との間でこれまで培ってきたものの厚みを考えれば、次のステップではさまざまな展開の可能性があると考えられる。企画を練り直して、改めて応募していただければ幸いである。

<継続助成の選考日程および手続き>

選考は下記の日程および手続きにより実施されました。

【応募受付】8月5日～16日（応募総数：13件）

↓

【選考委員会】9月21日（応募団体によるプレゼンテーション実施）

↓

【委員長決済・選考結果】助成件数8件、助成総額1,500万円を決定。

*上記プロセスと並行して、ファイザー社内担当部署による、医薬品業界・社内規定および関係法規に基づくコンプライアンス確認作業を実施。

継続助成対象プロジェクトの概要と選考委員会推薦理由

【継続助成 2 年目】

- (1) プロジェクト名： 発達に障がいのある子ども・若者のための心とからだの講座～ファシリテーターの養成および交流サロンの開催～

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人子ども&まちネット

代表者名： 伊藤 一美

主な活動地域： 愛知県

心身の発達に障がいのある子ども・若者は、思春期の心と身体の変化をうまく受け入れられず、自己肯定感が下がったり、犯罪の加害者や被害者になる可能性もあるといった問題を抱えている。

助成 1 年目は発達に障がいがある子ども・保護者・支援者向けの「心とからだの講座」を実施し、これを踏まえ、助成 2 年目は保護者・支援者を対象にファシリテーター養成講座の開催と、発達に障がいのある子ども・若者のための交流サロンを開催し、思春期の心身について丁寧に学び、ゆるやかにつながる場所を設ける。

今後の継続的な展開には、活動をさらに広めるファシリテーターの存在は重要であり、ファシリテーターやボランティアスタッフ等が子どもたちのサロンで交流を深め、地域のよき理解者となることが期待される。子どもたちが「生と性」をポジティブなものとして捉え、安心して暮らしていける地域社会づくりにつながるよう期待したい。

- (2) プロジェクト名： 中国帰国者に対する介護予防教室と地域ネットワーク形成

助成種別： 市民活動

団体名： 夕陽紅（シーヤンホン）の会

代表者名： 牧田 幸文

主な活動地域： 京都府

終戦に伴い中国に残された中国帰国者 1 世は、日本語や日本の生活習慣に馴染めず、生活上の苦勞を多々抱えていると言われている。1 世の平均年齢は今や 70 歳を越え^{*1}、高齢化が進み、介護問題が中心になってきているが、地域からも、時には家族からも孤立化し、高齢期の生活や健康上の問題を正確に伝えられず、適切な支援が得られ難いという課題を抱えている。

本プロジェクトは、中国帰国者の 2 世、3 世が中心となり、1 世の高齢者が健康で安心して生活が送れるよう、地域社会との連携に取り組んでいる。介護予防教室の開催、帰国者同士の交流、2 世、3 世の介護資格の取得支援などに取り組み、帰国者 1 世のニーズに応じていく。また、中国の伝統料理や舞踊など中国文化を切り口に、1 世の特技を生かし、地域との交流を図っていく。

助成 1 年目は地域に開かれた活動を展開しており、今後、この取り組みが他の地域ともつながり、活動が広がるよう期待したい。

(^{*1}参考：厚生労働省「中国帰国者生活実態調査」)

(3) プロジェクト名： 月と風と 劇場型銭湯2014

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人月と風と

代表者名： 清田 仁之

主な活動地域： 兵庫県

障害者とその家族は、一般に社会から分断されがちであり、公的な福祉サービスを越えて地域と実質的なつながりをつくることが強く求められている。本団体は、重症心身障害者とその家族に対してヘルパー派遣事業を行う一方で、助成1年目は「ヒトリボッチジャンイプロジェクト in 劇場型銭湯」に取り組み、重症心身障害者を対象に銭湯体験会を開催し、当事者が地域の人と一緒に銭湯で入浴する機会を生み出してきた。

助成2年目は、重症心身障害者と健常者とのつながりを質的にも面的にも時間的にも広げるため、小規模な銭湯入浴会の回数を増やし、若者や学生との銭湯入浴会や、同級生や先生との銭湯同窓会に取り組む。

重度障害者支援という困難・深刻になりやすい取り組みを、障害者が地域に出ることによって、銭湯という地域資源をも活性化させていくという発想で、軽やかに、生き生きと取り組んでいる。障害者支援の取り組みに留まらず、コミュニティの活性化につながっていくよう期待したい。

(4) プロジェクト名： 臨床美術によるメンタルヘルスケア事業

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人沖縄県福祉ネットワーク協会

代表者氏名： 赤嶺 徳仁

主な活動地域： 沖縄県

本団体は、精神疾患の人たちの早期発見や身近な市民の理解を得るために、臨床美術という手法を活用し、障害の種別を超えて幅広い対象者に働き掛けを行っている。また、当事者や家族が抱えている問題解決のきっかけや心の開放を取り戻す機会を提供している。

心の問題は、誰もが置かれた環境によって、大なり小なり遭遇する個別的な問題であり、外からは見え難い。本プロジェクトは、閉ざされた心の問題を視覚的に表現することによって、共感、理解し認め合う場づくりを行っている。助成2年目は、助成1年目に引き続き、臨床美術の研修会、展示会、ワークショップに取り組み、これらの活動を通じてつながり始めたメンタルヘルスケアのネットワークキングに取り組む。

創作・表現活動は、心の充足感と“なにかができる”という意欲につながり、家族をはじめ相談に応じる人、また地域の市民にもつながりやすいコミュニケーションの媒体である。さらにネットワークキングは、視点の違いを新しい発見につなぎ、多様な動きを創り出していく可能性がある。一人ひとりの普段の成長の場として、養育時、就学時、就職時の多様な表現が、個性や人間性を育み合い、共生の文化につながるよう期待したい。

【継続助成3年目】

(5) プロジェクト名： どんまいネットみやぎ推進プロジェクト

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人ほっぷの森

代表者名： 白木 福次郎

主な活動地域： 宮城県

本団体は、高次脳機能障害者と家族を日常的に支援する団体の立ち上げ、ニーズや課題に沿った支援の仕組みやネットワークの構築、課題解決に必要な新たな社会サービスや空間の創出など、高次脳機能障害者とその家族が地域で安心して暮らせる社会基盤づくりに取り組んでいる。

助成1年目は、宮城県内7圏域にネットワークを設立し、助成2年目は、当事者および家族を地域社会で支えていくためにピアサポーターの育成に取り組んだ。助成最終年は、各地域で行政や関係機関との連携強化や、ピアサポーターの育成に引き続き取り組む。

行政とのつながりや、担い手の育成は急務となっているが、専門職ばかりでなく、地域の市民と共に創り上げていくことも重要である。ネットワークは新しい価値や仕組みを生み出す場になると共に人材育成の場にもなっていく。また、地域で自立して暮らすセーフティネットとして、多様なネットワークの連携が重要になる。ニーズを検証し、市民の学びの場をつなぐネットワークとなり、地域再生の確かな力となるよう期待したい。

(6) プロジェクト名： 薬物・アルコール依存症者の自立支援および就労プログラム開発モデル事業

助成種別： 市民活動

団体名： 特定非営利活動法人潮騒ジョブトレーニングセンター

代表者名： 栗原 豊

主な活動地域： 茨城県

薬物、アルコール等の依存症に対する国民の理解は緒に就いたところである。その機をつくってきた民間回復施設等の努力が実り、全国に着実に拡大してきた。しかし、薬物・アルコール依存症者の社会復帰について地域社会の理解はまだ十分ではなく、就労に至っては厳しい状況と言わざるを得ない。

助成1年目、2年目は、依存症の人たちの職業訓練、就労支援に関する新規プログラムの開発と、地域における雇用の受け皿づくり、ネットワークづくりに取り組んできた。試行錯誤しながらも着実に前進し、特に地元の農業者を指導者として地域との連携を深めていることや、荒地を開墾して農地を拡大し、新しい農作物の開発に取り組むなど、これまでの実践が評価された。

助成最終年は、こうした実践について、就労支援フォーラムなどを通じて地域の人たちや関係者への理解を促進すると共に、雇用の実現や農産物のブランド化など新たな展開も期待したい。

(7) プロジェクト名： 刑務所を出所した薬物依存症者の包括的な回復支援プロジェクト

助成種別： 市民活動

団体名： フリーダム

代表者氏名： 倉田 めば

主な活動地域： 大阪府

刑務所に収監された薬物依存症者は、仕事や家族など人とのつながりを失いやすい。また、出所後の再犯率は5割^{*1}を超える。本団体は、出所後の薬物依存症者に当面の宿泊先、食費、生活費を提供するなど「包括的な回復支援プログラム」を提供している。

入所受刑者の罪名別構成比を男女別に見ると、覚せい剤取締法違反は男性が24.4%に対し、女性は39.7%と男性の比率を上回っている^{*2}。しかし、本団体が支援を行った対象者のうち、女性は3%未満に留まっている。そこで、助成最終年は、出所後の相談支援活動に加え、女性薬物依存症者のサポートプログラムを展開する。

女性の場合、出所後に家事、子育て、介護などの負担が重くのしかかり、回復ケアが困難になるケースが多い。女性薬物依存症者のニーズを調査し、刑務所を出所した女性がダルクなどの社会資源につながり難い構造的な問題を明らかにした上で、これを踏まえて女性支援プログラムを構築し、全国のモデルケースとなるよう期待したい。

(^{*1}参考：厚生労働省 HP ^{*2}参考：平成24年版犯罪白書)

(8) プロジェクト名： 死の直後から寄り添い支える「wiz サポーター」派遣システム構築プロジェクト

助成種別： 市民活動・市民研究

団体名： カウンセリングスペース『リヴ』

代表者名： 佐藤 まどか

主な活動地域： 大阪府

事故死や自死といった家族の突然の死に際して、遺族は様々な感情を抑圧して単独で死の後処理に追われる。このような遺族に対して柔軟な支援がないために、家族の突然の死が長期にわたり遺族の精神面に多くの影響を与え続けている。

助成1年目、2年目は、自死をした配偶者や親を持つ遺族・遺児に対して丁寧なインタビューを行い、遺族が抱える問題点を明らかにしてきた。先進的かつ地道な調査を積み重ね、貴重なデータを集めており高く評価できる。助成最終年は、これまでの調査を踏まえて、家族の突然の死に遭遇した遺族に寄り添い、そのニーズに沿って遺族を支える「wiz サポーター」を養成し、派遣するシステムを構築する。

本団体のこれまでの調査の蓄積が、サポーター養成プログラムの立案に十分生かされるよう期待したい。